「エデンの東の、そのまた東」

作　菅野彰
上演時間　四十分

女／闇
男／光

舞台の上手と下手にそれぞれに椅子。
上手に男。
下手に女。
基本は座っているイメージ。

女「エデンの」
男「東の」
女・男「そのまた東」

男「（全体に明るく。暗さはない）子どもの頃から外国に住んでる。
いやここ地球じゃないかも！
なんでここで生まれたのに外国なのかって？　それは誰とも言葉が通じないから。
大人になった今も、誰の言葉もわからないし、誰にも僕の言葉は通じない。
宇宙なのかな？ ここ。
なら地球は何処だろう？
別に地球じゃなくてもよくない？　地球も世界も一つじゃなくてもよくない？　『ザ・ワールド』、何『ザ』って。『ザ』は一個しかないものにつくんだよ。アースもワールドもいっぱいあってもよくない？　単数の『ア』にしてよ。『ア・ワールド』！　ほら何言ってんのかわかんないでしょ！」

男・歌1タイトル「僕は宇宙に住みたくない」

「僕は闇にはちょっと弱い。闇は見えないからさ。
白が黒に弱い感じ。わかる？
ほら、バケツに白い絵の具を溶くでしょう？
そこに一滴でも黒い絵の具が落ちたらもうおしまい。
だいたいおしまいな感じ。
また黒い絵の具が落ちてきちゃった。
あーあって思っちゃう。
暗いから見えないだけのに、僕も見えなくなるよ。
見えないことって見えなくない？
何言ってんのって思ってる？
見えないって見えないけど見えないだけで、『ない』わけじゃないんだ。
だから闇とか黒とか夜とか怖い。
見えないけどあるから怖い。
黒くても闇でもいいんだけど、見えないからなんだかわかんないのが怖いんだよ。
何が怖いのかわからない？
大丈夫！　わかってもらえたことはないよ。
でも人が僕をわからないことが、宇宙に住んでることが、本当はすっごくいや。
すっごくいや。すっごくいや。すっごくいや。
なんでいやなんだろ？
それはよくわかんない。
宇宙じゃないとこに住みたい。」

女「（男の歌を聴きながら、少し被って。女の言葉が被るときには鼻歌程度の歌を男は歌う）生まれたときからよく悲鳴が聞こえるの。
ほらまた（男の歌のこと）。なんでも聞こえる。なんでも見える。
見えてるの。
鬱陶しいわ。うるさいのよ。
……何か言ってる。めんどくさ〜い。
（男の歌を聴くのではなく、ふと自分の話）私はなんだか一人。
そんなに悪い人間じゃないと思うんだけどどうしてかしらね。
本当はそれも、どうしてなのかは知ってるの」

女が男に歩み寄る。
歌を聴いている。

女が自分の声を聞いていることに男が気づく。
男はじっと女を見て、女は困って苦笑。この辺は何処も軽快に、深刻にならない。

男「国境がない方がいいと思わない？」
女「思わないわ」
男「すごい即答。なんで？」
女「だってみんな違う人間だし」
男「違う人間だから、好きなとこにみんな住んだらいいじゃん。『僕たち』『私たち』とか勝手にまとめられたくないじゃん。『たち』の中に入るならどの『たち』に入るか自分で選んだらいいじゃん。『たち』の中からはみ出たらかわいそうじゃん。だいたい僕たちの『たち』ってなんだよ。どっからどこまでが『たち』なんだよ！」
女「クロマニヨン人以降よ」
男「……想定外の答えが返ってきたんだけど」
女「養老孟司（ようろうたけし）が言ってたのよ」
男「ああ、おじいさん。テレビで見たことある」
女「脳みその偉い人よ。ネアンデルタール人は入らないそうよ」
男「（突然の憤慨。コミカルなまま）どうしてネアンデルタールは仲間はずれなの!?」
女「あなた今『たち』って誰だよって怒ってなかった？」
男「霊長類全部なら文句はないよ！」
女「何に対する文句なのよ！」
男「実はどっから何処までが霊長類なのかもわかんないんだけどさ！　僕『たち』にするなら全部にしてみんなにしてってこと！」
　男、椅子に上って立って演説風に。
男「全部同じにして！　脳みその偉い人！」
　女、呆れながらも少し微笑ましく見ている。
女「（やさしさ）そうね。でも危ないから降りて」
男「近づいてるんだ」
女「何に？」
男「（天を指差す）そういうの決める人。どっからどこまでが同じとか違うとか決める人」
女「バベルの塔ね」
男「（バベルの塔になる）僕のこと？」

女「そうよ。神様に近づき過ぎて罰を与えられたの」
男「神様ってなに？」
女「楽園に木を植えて、実を食べた人を追放しちゃう人」
男「なんでじゃあ木を植えたの」
女「兄弟の貢ぎ物を弟からだけ受け取って、兄を愛さなかった人」
男「お兄ちゃん弟のこと嫌いになっちゃうじゃん」
女「兄は弟を殺したわ」
男「（怖そうに。コミカルに）君って物騒だね」
女「聞かれたことに答えただけよ！」
　女、少しトーンを落として。
女「神様の話は、そういう不条理が世界そのものだという教えよ」
男「それで神様に近づこうとした僕はどうなるの？　僕はバベルの塔」
女「そこにいる人々の言葉が通じなくなるわ」
男「なーんだ。そんなの慣れてる。別に不便じゃないよ。ずっと誰とも言葉が通じないから喋らない。不便じゃないよ。少し寂しいだけ。少し悲しいだけ」
　深刻にはならずに、女と話していることに気づく。
男「あ、でも君とは喋れてる！」
女「（意味を持たせない）私は人と話す人よ。ここで何してるの？」
男「なんとなく家を出て、なんとなく学校とかそういう……人が集まるところから離れて。
そこで皿洗いのバイトしながら、ここで時々喋ったり歌ったりしてる」
女「一人で？」
男「笑ったり怒ったりもするよ」
女「危ない人ね」
男「……また来てくれる？」
女「（やさしく考える）考えておくわ」

　場面転換。
　それぞれの椅子に戻る。

　その夜。
　携帯電話のコール。
女「（深夜に、寝入りばな起きた）……もしもし。ううんいいの、まだ起きてたわ。どうしたの？　うん……うん、うん、うん（きちんと誰かの話を聞い

てあげている)。
頑張り過ぎなのよ。真面目だから。もうちょっと自分を甘やかしてあげてよ。
あ、そうだ。ねえ日曜日……」
日曜日にその人を美術館に誘おうと思ったけれど、相手は違う話を始める。
女「そう恋人ができたの。
(ここからは電話の相手と話しているのではなく、自分と対話している)知ってたわ。あなたはとても素敵な人だから。
誰かがあなたを愛するし、誰かをあなたは愛するわ。
私は知ってた。
良かったわ」
女、電話を切る。
女「(深刻にはならない。軽快に愉快に)私はいつもだいたいこんな感じ。
別に好きで一人でいるわけじゃないのよ。
生まれつきこうなの。ずっとこうなの。どうしてとかないのよ。
なんだかまるで私はいない(存在しないという意味)みたいに一人。
ここにいるのにね。
そんなに悪い人間じゃないと思うんだけど、一日目に分けられちゃったの。
なんの一日目かわかる?」

場面転換。
数日が経った(照明を落とす、などで)。
男「(無感情に)数日が、経った」
また歌っている男。
来ちゃった、という様子の女。
男は女に気づく。
男「細かく国を分けたらいいんじゃないかな!?」
女「なんとこの間と180度違うこと言ってるわ」
男「やりたいことやりたくないことでさ。好きなこと嫌いなこととか。分けたらいいと思うんだよ。どんな国に住みたい?」
女「バーベキュー」
男「バーベキューする国? 僕も大好き!」
女「バーベキューをせず」
男「……したくないんだ」
女「スイカ割りを……」
男「いいね夏の風物詩じゃん! なんか懐かしい!」
女「スイカ割りをせず」

男「雨ニモマケズ」
女「風ニモマケズ。雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ」
男「なんだっけこれ。学校で習った」
女「宮沢賢治よ。
ホメラレモセズ
クニモサレズ
サウイフモノニ
ワタシハナリタイ」
男「そういうの！　そういうのなんだよ！　そういうの！」
女「雨ニモマケズ？」
男「(はたと) 雨には負けないけど、僕たち同じ国に住めないじゃん！」
女「いやー、見るからに住めなさそうよね同じ国に。私たち」
男「なんかしたいことないの？　やりたいこと！」
　考え込む女。
女「何もしない」
男「え？」
女「何も感じないことをしたい」

女・歌２　タイトル「私は地球に住んでるみたい」
「ごく普通に生まれて来たつもりなんだけど。
そんなに難しいことも考えてないつもりなんだけど。
悪い人間でもないのよ？
ネガティブ過ぎるわけでもないし、
もちろんポジティブ過ぎはしないけど。
それでも時々すごく疲れてしまうの。
嘘も吐いてない。
無理もしていない。
愛しすぎないけど愛さないわけじゃない。
ごく普通に誰かを愛したりもする。
期待し過ぎたりしない。
だけど何処かで期待してるのかしら。
だから期待しないようにって思ってるときにはもうくたくた。
だから何も感じないをしたい。
ものすごくしたい、ものすごくしたい、ものすごくしたいの。
どうしてしたいのかしら。
それはよくわからないわ

時々でいいのよ。
道端の石のように、たたずむ木のように。」

女「石や木に怒られちゃうか」
男「……それなら僕もしたい」
女「無理してない？」
男「してない。僕も時々したいよ、何も感じないをするの。
でもこれは駄目なやつだな」
女「細かく国をわけるやつのこと？」
男「そう。すっごく細かくなっちゃうし、同じ国に住めない人がいっぱいだ」
女「(軽くからかうような気持ち) 国境をなくしたり細かく国を作ったりしてどうしたいの？」
男「みんな幸せになりたい。
誰も否定されない。誰も誰のことも否定しない。違うと言われない。違うと言わない」
女「(みんなそれぞれ、という意味) 違うのに？」
女の声を聞いて、それを知る男。
男「そうか」
考え込んで、教えてくれた女を見つめる。
男「君はなに？」
女「考える人」
男「(ロダンの彫刻の考える人の格好) こういうの？」
女「そういうの」
男「これ石みたいなやつだよね。粘土？(ロダンの彫刻のことを言っている)」
女「私の話はいいのよ」
男「そんなこと言わないで教えてよ」
女「じっとして目をこらしていると見えるから、私にはあなたも私も見える」
男「見えてるね。本当だ僕は君が見えてない (じっと女を見る)」
女は困ったように笑う。

それぞれの椅子に戻る。
静止。
男「(少し女を待つ気持ちをにじませて)数日が、経った」
女、男を待つ気持ちが生まれて静かに目を閉じる。

数日が経つ。
女「まだここにいるの？　家に帰らないの？」
男「家かー。お父さんとは上手くやれない」
女「おっと反抗期長い」
男「ずっと反抗期。お父さんを見てると思う。お父さんは資本主義そのものだ」
女「じゃああなたは共産主義者なの？」
男「物騒なこと言わないでよ！」
女「あなたが先に言い出したんでしょう!?」
男「君っていっつも物騒。
もっと大事なことがあるはずなのにって、いつも思っちゃう」
女「お父さん？」
男「うん。あんな風になりたくないって、いつも思っちゃう。でもそんなこと絶対言いたくないから、僕はこうして道にいるわけです」
女「あんな風になりたくないのなら、他になりたい自分があるはずよ」
問い掛ける女に、言われたことの意味考える男。
女「どんな自分？」
男「……奪わない人……傷つけない人になりたい」
なりたい自分に気づく。
男「（今教わった言い方を噛み締める）あんな風になりたくないじゃなくて、僕はこうなりたい」
女「奪わない人。傷つけない人。」
男「（でもまだ父のことが自分の中で納得できない）お父さんは海に魚がいたら全部取ろうとする。果物が実ってたら全部欲しいと思う。そうすることを考える。そんなことに未来はないよ」
女「じゃあ未来のあることをしてみたら？　未来のあることはどんなこと？」
男「未来は……だから魚も果物も食べない分は取らないで。そしたらまた魚は増えたり、果物は増えたり。僕も増えたり」
女「あなたが？」
男「そう。僕はまだまだ増える。血も骨も肉も増える。脳みそも増える。奪わないことも傷つけないことも増え続ける。心も増えるよ。増えることがしたい」
言葉にしてから、「未来のないことはしたくない」から、「未来のあることをしたい」と言葉が変わったことに気づく。
男「違う言葉なのに、同じ気持ちだ。
未来がないんじゃなくて、未来のあることがしたい。僕は」

教えてくれた女を見る。
男「どうして言葉が違うのに同じ気持ちなの？」
女「あなたが思っていたことよ。もともと」
男「（女に気づき始める）君は誰？」
女「（尋ねられて驚く）それは初めて訊かれたわ」
男「どうして？」
女「誰でもみんな自分のことで精一杯。それは普通のこと。
自分を大切にするのは愛する人を大切にするのと同じことよ。
大切な人を大切にするのは、大切な人であって欲しい」
男「（わからない。軽快に）突然ものすごく難しい」
女「（男がわからないことはかまわない。慣れている）私は、わかりたいの。
知りたいの。
だから私は聴く人。
ここを動かない」
男「どこ？」
女「私は望まない」
男「何を」
女「多くを」
男「どうして？」
女「与えられないことを知ってるから。
多くを知ってるの。与えられないことは特別なことではないの。
その私が知っている多くの中の一つよ（与えられないということは、些細なこと）」
男「（深刻にならない）ごめん全然わかんない」
女「聴きたいし、知りたいの。見えてしまうし、わかってしまう。
しまうっていうほどのことじゃないわ。見えてるだけよ。みんなが見ていないものが見えるの。
でも全部知られるのはみんないやなのね。理解されたいけど見られてるとわかったらもう怖いのでしょう」
男「なのにどうしてまた君は聴くの？」
女「ずっとここにいるからよ。聴こえるから聴くの。それだけ」
男「……あれ？　僕がここにいるんじゃなかったっけ？」
女は何も答えない。

それぞれの椅子に戻る。

静止。

数日が経った。

男「(女を待つ気持ちをあらわに)数日が、経った」

女が男に歩み寄る。

男「やっぱり僕がここにいるよね？」

女「いるわ」

男「この間君が言ったことがわかんなくて、でも引っかかって。わかりたくてわかりたくてでもわかんなくて大変」

女「(朗らかに笑う) わからなくていいわよ。当たり前よ」

男「なんで当たり前だと思うの？　僕は人が僕をわかんないっていうたびに、少し何かが小さくなるよ」

女「何が小さくなるの？」

男「ここに (胸。心) やわらかいきれいな石みたいなのがあって」

女「やわらかいけど石なの？」

男「イメージして！　石なんだよ。でも君が触ったらきっとやわらかいよ。きれいなんだよ」

女「自画絶賛ね」

男「絶賛きれいなの。そういう大切なものがね、減る。減って小さくなる」

女「きれいなら小さくしちゃ駄目よ」

男「君は幸せ？」

女「どうしてそんなこと聞くの？」

男「わかんないけど気になるから、君の言葉が。

僕はお父さんが銀色のものを身につけて見せるたびに思う。

世界が全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。だから君も幸せじゃないと僕も幸せにならない」

女「それ宮沢賢治のパクリね」

男「あ、バレた。ハレルヤハレルヤ」

女「銀河鉄道の夜ね」

男「そう。この間君が『雨ニモマケズ』って言ったから」

女「あなたが言ったのよ」

男「君が続きを言ったから、なんだか読みたくなって図書館に忍び込んだ。すごいねなんでも知ってるの？　宮沢賢治も脳みその偉い人も全部わかるの？」

女「だって子どものころ読んだわ。たくさん人の言葉を読んだ。たくさん人の言葉を聞いた。たくさん人の言葉を歌ったの。

そして他人は他人だと知ったわ。他人は他の人。私ではない人。
それはとても大切なことだった。
他の人は他の人なのよ。
私は知って良かったと思うの」
　男は真摯に女の言葉を聞いている。
男「他の人のことはどうするの？　大切にするの？」
女「いいえ、他の人は自分じゃないと知っていれば私はそれでいいの。
あなたがいて、私がいて。ここにいるけど、他の人なの。
思い通りにはならない。あなたもそうよ。誰かの思い通りにはなれない」
男「他の人はとても大事だ」
　考え込んで、理解したかのような男。
男「大事だけど君の話はやっぱりすっごく難しいや。（笑う。実は理解はあんまりしてない。この先は、他の人、からの連想で出て来る感情）僕も難しいこと言うね！　僕は人間には、自分にしかできないことはないって思う」
女「（話が逸れて安心して笑う）そうなの？」
男「学校休んだ日に、テレビでおじいちゃんの俳優さんが言ってた」
女「人の言葉なの？　ずるいわね」
男「でもその日から僕の言葉にもなった。
僕の愛も、僕じゃない人にもできる」
女「（すぐに理解する）だから誰にでもできる愛を、あなたは特別な誰かのために、特別じゃなくても誰かのために、がんばらないといけないのね」
男「（理解されて驚いて女を見る）……そう。
そうなんだ！
僕は愛をがんばらないといけない。がんばれば僕にでも、誰にでも、愛はできる」
女「（揺らがない気持ちが少しだけ揺れる）……私にも？」
男「もちろん。
家族の愛以外は、誰にでもできる（この言葉で母親のことを思い出す）。
不思議だ。お母さんは僕を愛してくれたけど、少しもわからなかった。僕の言葉が。
僕にも段々お母さんの声が聞こえなくなった。
（母親に向かって、段々と小さくなる声）お母さん。どうして嘘を吐くの？
お母さあん……大好き。お母さん大好き……」
　どうしたらいいのかわからない女。
　少し思い切って男の髪を撫でる。
　撫でられたことにしばらく男は気づかない。

ゆっくりと気づいて、ゆっくりと女を見る。
女は困ったように笑って、ばいばいと手を振って自分の椅子に戻る。

女「(わずかな期待。おずおずとした気持ち。待ってくれているのかという初めての思い)数日が、経った」
静止。
数日が経った。
男「(女に、明るく朗らかに)ねえ。この間はありがとう」
女「(動かない気持ちが動き始めて、戸惑っている)何が?」
男「髪を撫でてくれてありがとう」
女「お母さんの愛は、私にはできないけど」
男「でも違う愛ができた。僕にはそれがすごくすごくすごく」
続く「すごく」を女は不安そうに聞いている。
男「すっごく幸せだった。違うのもわかった。それが嬉しいことが幸せだった。違う愛でも嬉しい自分をまだ知らなかった」
女は何も言えず男を見ている。
男「だからありがとう」
男、突然夕焼けに気づいて指差す。
男「あ! 見てすっごいきれいな夕焼け!!
夕陽に向かって走ったりしちゃおうか! ほら、あの向こうの海に沈む夕陽!」
女「(男の変わらない様子にほっとした気持ち)突然ですが海なの?」
男「そう! 高台まで走ろうよ! きっとすごくきれいだ」
女「よしましょう。間に合わないわ」
男「そんなことないよ」
女「間に合わないわよ。ほら、もうあそこまで落ちてる」
男「高台から見たら、海に沈む夕陽はきっともっときれいだ」
女「だから、間に合わないの。もしかして地動説を知らない?」
男「知らないかもそれ。いいよ知らない地動説なんて! 走ってみないとわからないよ」
女「走って間に合わないのはいやよ」
男「どうして?」
女「きれいな夕陽を期待して走って、間に合わなかったらすごくがっかりするわ」
男「しようよ!」
女の手を取る。

男「がっかりしようよ！」
女「いやよ……」
男「走ろう！」
女「いやだってば」
　ものすごく走る二人。
　息を切らして、その場に座り込む。
女「（恨みがましくコミカルに）……ほら、間に合わなかった」
男「（あっけらかんと悪びれず笑っている）そうだね。沈んじゃった！」
女「こんなに息が切れてバカみたい」
男「本当だね。バカみたいじゃなくてバカなのかも」
女「（海を見る）でもきれい」
男「海に落ちていく太陽」
女「橙色に染まってた空も細い雲も、だんだんと暗い紫色に変わっていく」
男「海に向かっていくほど少し薄い紫色、てっぺんは濃い紺碧（こんぺき）。夜のグラデーション」
　ぼんやりと海を見ている二人。
女「バカみたいなのも、がっかりしてるのも。私の心ね」
　そんな女を、愛おしく見つめる男。
男「（自分が）愛おしいでしょう？」
　言われた言葉の大人びた様子に、女は驚き激しく戸惑う。
女「驚いた」
男「（見守るまなざし）何が？」
女「あなたみたいな子どもに、分かったようなことを言われたからよ」
男「君は子どもだね」
　女は戸惑う。
男「とてもかわいいね」
女「やめて」
男「だってかわいいよ。愛おしい」
女「やめて」
男「君は子どもみたいだ。生まれたての赤ん坊みたい」
　子どもみたいだと言った男を、女は長く見つめる。
　こういうことは今までもあった。
　こういう人は今までにもいた。
女「やさしい言葉が選べるようになった。あなた」
男「君が教えてくれた」

女「いいえ。あなたはノドに行くの」
男「ノド？」
女「誰のものでもない少しの土地に、あなたの言葉、あなたの歌」
　女はもう男をあきらめている。
女「あなたは家を出て、ノドに向かっているのよ」
男「(男は変わらない）ノドって何？　喉？　ノドグロ？」
女「ノドグロは魚ね」
男「不細工な顔してるんだよ。一度じいちゃんちで食べた。でもめちゃくちゃ美味しい。ノドグロ食べに行く？」
女「高いのよ。ノドグロって」
男「じゃあ釣りに行こうか」
女「一人で行きなさい」
男「冷たいなあ」
女「あなたは一人で行きなさい」

女・歌３　タイトル「あなたの訪ねる場所」
「エデンの東の、そのまた東には、
荒れ果てた放浪の大地があります。
神の恵みはありません。
お恵みはないの。
だからわけもわからず取り上げられることもないのよ。
大丈夫、あなたの言葉を聞かせて。
大丈夫よ、あなたはとてもやさしいひと。
耕したいところを耕して。
愛したい人を愛して。
あなたと誰かの幸せのために愛を少しがんばって。
そうしたら明日が来る。
そういう暮らしをノドというの。
放浪のことよ。
それは当たり前のこと。
誰にも赦される当たり前のことなの」

女「追放されてしまって、ノドに行くの」
男「誰から追放されるの？」
女「あなたを否定する人からよ」
男「自由になるってこと？」

女「あなたは最初から自由よ。ずっと」
男「じゃあ君も？」
女「そうね。きっとそう」
男「でもどうして僕たちは」
女「（『たち』と言ったことを少しからかう）僕たち？」
男「そう僕たち霊長類は……ネアンデルタール人も入れてあげて脳みその偉い人！」
女「人間でいいわ」
男「人間は、どうして気になるのかな？
誰が僕をどう思うか。
お父さんが僕をどう思うか。
お母さんがどうして僕を見ないのか。
教室の中に一緒にいる人が何故ぼくを拒むのか。
道行く人が振り返ってどうして僕を見るのか。
僕の歌を誰が聞くのか。
聞かないのか」
　考え込んで、もう解放されていることに気づく。
男「あれ？　でも結構どうでもよくなってきちゃった。
（女に）今は君が僕をどう思うかだけが気になる。すごく気になる」
女「どう思って欲しいの？」
男「よく思って欲しい。好きでいて欲しい」
女「あなたがとても好きよ。やさしい言葉で話したかった、やさしいあなたの心。上手くできなかったから、ここに一人でいたのね。誰かを傷つけることが怖かった？」
男「うん。すごく怖くかった」
女「もう大丈夫よ。傷つけない。もうできるわ。やさしい心のままの、やさしい言葉が。
行って、たくさんの人に聞いてもらうのよ。あなたの言葉。ゆっくり声にして。伝わるわ。銀色の時計のお父さんにも。お母さんもあなたを見るわ」
　行きたいところに行って、という女の気持ち。
男「家には帰らないよ。帰らなくていい家もあるんだ。行かなくていい学校もある。今知った。
（男の心はもう定まっている。落ちついたまま）君は？」
女「え？」
男「僕は最初、君のことが全然見えてなかった。僕の言葉を聞いてくれる君は？

初めて人とちゃんと話した。そして君のことを考えた。たくさん。
やさしい言葉の出口を教えてくれたやさしい君が大好きだ」
ふと立ち上がって、みんなに教えるように。

男・歌４　タイトル「君が教えてくれたこと」
「家に帰ってもいい。帰らなくてもいい。
学校に行ってもいいし、行かなくてもいいよ。
お恵みは少しもいらない。だから取り上げられることもないんだね。
君が教えてくれたから、僕は恐れずに声を上げるだろう。世界に向かって。
もしかしたらたくさんの人が聞くだろうね、僕の心を。
僕の歌を。
だけど君だけが聞いていた。
君はずっとそこにいたね。
君は、知ろうとしてくれるひと。
僕は君が大好きだ。
僕は君の幸せのために愛を少しがんばるね。
そうしたらまた明日が来る。
そういう明日はなんていうんだろう？
放浪？　楽しそうだ。
でも当たり前だと言ったね。
君は当たり前だと教えてくれた」

男「君は？」
女「（何を言われているのかまだよくわからない）私は、何？」
男「君の望みを聞かせて」
女「私の？」
男「君の願いを聞かせて」
女「私の？」
男「そしたら僕は必ず叶える。
だってそれが僕には世界だって、僕はもう知ってるよ？
世界のことが見えて、だから僕には君の願いが一番大切な世界だとわかった。
見渡せたからわかったんだ」
女「私は」
女は男に自分が見えていることをようやく知る。
女「私は闇」
男「（男ではなく、聖書を朗読する人として）はじめに神は天と地とを創造さ

れた。地は形なく、むなしく、闇が淵のおもてにあった」
女「闇は本当は最初からあったの。光と闇が分けられたのはいつだと思う？
なんと天地創造の一日目。第一日目から、闇と光は分けられちゃった」
男「（男ではなく、聖書を朗読する人として）神は『光あれ』と言われた。すると光があった。神はその光を見て、『良し』とされた」
女「（男に、そして世界に）闇を見たことがある？
闇の声を聞いたことは？
何処にでもあるの。何処にでもいる。ずっといるの。
でも光がさせば、闇は見えなくなる。
見えないけど消えたんじゃないの。闇だけど光と同じにずっとここにいるの。
本当は」
　女の気持ちは墜ちて行く。
女「だけど世界は光だと、みんな思いたいのよ」
男「みんなって誰？　クロマニヨン人？　ネアンデルタール人も入る？
それでも僕はそこに入んないよ」
　男の声が女にはっきりと聞こえる。
男「闇はとてもきれいだ。夕陽が落ちた海よりきれいだ。
すごくきれいだよ。
闇だから見えるものがあると君が教えてくれた。僕は君の見ているものがとても好きだ。
澄んだ闇が見渡しているものがとてもきれいだから、僕は闇が好きだ。それは光には見えない本当のこと。見えなくても決してなくならない、そこにある暗がり。誰でも持ってるもの」
女「（呆然と男を見る）そう言って欲しかった」
男「（今更の告白。女は知っていたけど、男は女に会うまで自分が光だと知らなかった）僕は光。時々君を照らしてもいい？」
女「ずっと一緒だった」
男「ずっと一緒にいた。気づいて良かった」
女「……よかった」
　手を取り合う。
男「ノドに行こう。追放されよう。
ノドで何がしたい？」
女「ノドグロが食べたいわ」
男「高いんでしょ？　じゃあ釣りに行こう」
女「あなたが釣って」
男「釣りはいやなんだね。わかった、僕が釣るから二人で食べようよ」

女「じゃあ私が焼くから、二人で食べよう」
男・女「行こう。二人で」
男「エデンの」
女「東の」
男「そのまた東」
女・男「(嬉しそうに幸せそうに) 荒れ果てたノドに、追放されよう」

女・男　歌５　「エデンの東のそのまた東」
男「白い絵の具が黒い絵の具に弱い。僕はそんな感じ」
女「それはね、光というの。あなたは光」
男「でも闇とずっと一緒にいたね。見えないから怖がってごめんね」
女「光に照らして欲しい朝もあるのよ。闇にだって」
男・女「光と闇は本当は同じ。
同じところにいたのずっと。
一日目に分けられちゃった。
だから行こう、エデンの東のそのまた東。
荒れ果てた土地。お恵みはないの。
お恵みがないから誰を愛してもいい。
どこに帰ってもいい。
最初は一つだったはずの場所、一つだった心に帰ろう。
帰ろう?」

光・闇「ねえ。私(ぼく)たち、今、本当に同じ世界にいる。本当だよ?」
光「本当なんだ」
闇「本当なの」
光・闇「同じ世界にいる」

END

●作中朗読
「雨ニモマケズ」宮沢賢治
●引用文献
「農民芸術概論綱要」宮沢賢治
「銀河鉄道の夜」宮沢賢治
「旧約聖書」